

章安灌頂にみえる佛性説

東 隆 眞

章安灌頂(五六一―六三二)は、智顛の撰述の大部分を筆録し、その宗教思想を整理する一方、涅槃經の釋義に着手して、從來の涅槃經諸説を攝取止揚し、また法華經との思想關係を明確ならしめ、涅槃經の判教上の位置を確定づけ、涅槃宗を事實上天台宗に合流する因由をなした。涅槃經の研究と智顛の宗教の思想的組織づけが、灌頂の主要な役割であつた。彼は慧思、智顛に比較して、涅槃經佛性説の意識的採用を試み、天台教學形成の基盤をより明示せしめた。智顛と灌頂との兩者の佛性説は、本質的には同一であるべきであるが、いまは灌頂の側から、彼の著述に於いて、その佛性思想をとりあげてみよう。

灌頂の佛性説をみる根本資料は、觀心論疏五卷、涅槃經義疏三十三卷、涅槃經玄義二卷の三部四十卷がとりあげられるであろう。

智顛示寂直前の口授たる觀心論を釋した觀心論疏に於いて、灌頂は、智顛の宗教を觀心と要約し、生死の一念たるその一心を衆生心中の如來藏とし、法華圓教の圓觀は、一念心、即ち中道如來實藏觀と規定した。觀心論疏第十一偈「問觀自生心云何知十境名十法乘遊四方快樂」を釋し、陰界入の一境は觀自生心即ち觀一念心となし、その觀一境が十法成乘を用い、一大乘を成じ直に中道に入るが、十法成乘の第一明不思議境は、衆生理具の如來藏を觀心すること、第

二發菩提心は、弘誓慈悲たる如來藏を顯出して定慧を修すること、第三止觀乃至第十不起順道法愛の次第は、この第一第二の如來藏が基底となつて、展開する構造をもつことは文意によつて明白である。更に十法成乘を詳細に論ずるが、觀不思議境は、一念自生心如來藏にして、これは十界百如を具足する。十界を地獄界十如と佛法界十如に分け、佛性を兩法界成立の基盤となした。なかに佛法界十如に於いて、如是相を緣因佛相、如是性を了因佛性、如是體を正因佛體となして、三因佛性説を導入し、如是相より本末究竟まで、悉く佛性十如の三諦三諦であると説く。また、慧を了因、行を緣因、これら二因に依つて正因を顯正し、佛法界を成ずると述べた。かくして、一念心は實相の境として、不思議境を無限に展開するが、その境を觀する智は、境智一體の智である。これら境智の兩者が、佛性の表裏であるのは論を俟たぬ。

涅槃經義疏三十三卷は、南本涅槃經の最初の注釋で、天台の立場から、經を五門に分科して、遂一的に説明した。彼は、涅槃經全體を佛性經と把握し、涅槃は總名にして、佛性はその別名と明白に立言し、卷第六哀歎品下に「新伊字者譬今三德法身即照亦即自在名一爲三三無別體故是不橫非前非後故是非縱一即三如大點三即一如細畫而三而一而三不可一三說不可一三故名不可思議」と述べて、伊字を本經全品の根本となし、不橫非縱の論理から、涅槃佛性觀を展開する。また卷第廿三師子吼品は、佛性體を名相體の三科に分説するが、佛性の標名について、佛性・第一義空・智慧・中道の系列に於て説示する經文に着眼し、第一義空は智慧、有とし、有は空に即し、空は三諦皆空、智慧は三諦皆照、また空は一空一切空、智慧は一照一切照、故に空有非空非有の三は、實相にして不可分の緣起的關係に屬

する旨を述べる。また三諦皆空と三諦皆照とに於て、第一義を空・智に二分し、空は空邊中の非偏執、智は空邊中の正見、不空はまた中邊の正見とし、かかる空智の第一義を佛性體とする。次に釋相について、この空智は前後淺深に非ず、即空の即智、即智の即空、非空の非智、空の智と四句推檢をなし、空・智の圓融せる第一義佛性の相をみる。このことは、卷第廿四師子吼品之一下に、三諦圓融の論理を驅使して、三種三諦佛性を説示するのと併せて興味ある所説と考えられる。

涅槃經玄義二卷は、義疏と同趣旨であるが、特に諸説に對する自説の立場を主張する。彼は、涅槃の體と用を釋する。涅槃體は、吉藏の大乗玄論で用いた五性佛性の分類を採用し、これに五重玄義の圓觀を照明して、天台の立場から自説を述べた。涅槃用は盛期涅槃師の靈味小亮、小山法瑤、開善智藏、莊嚴大斌らの本有佛性説を論破する吉藏の學說など四師に對して、佛性に本有當有の區別は無いが本有當有なければ涅槃の勝用は成立せぬとして、各自に涅槃用を認め、有無雙俱雙非の論法を用いて、四利益を挙げ、各四の一門と三門との關係に就て、本有常用の一門は三門の用を含み、三門また本有常用の一門を現わすとした。かく、涅槃師の諸説を吉藏が三論空觀に於いて否定せるを、灌頂は更に批判して、有無等に偏執するを捨て同時に是を捨い、圓融法門から天台の立場に統一攝取した。涅槃經義疏中には、湛然の私見加筆が見えるが、それは非情佛性説に關する事項で、慧思、智顛に見えず、湛然に始まるとされて來た佛性遍在非情有佛性説が、實は灌頂に斷片的な明文が存在する。卷第廿五師子吼品之二に「佛答隨緣各異受名不同不得名麻油得名尼拘陀油衆生佛性亦爾衆生中有佛性草木中無佛性而有草木等性」また卷

章安灌頂にみえる佛性説(東)

第十七梵行品之一に「當知衆生有非衆生若言諸法有安樂性即非衆生亦是衆生情與無情有性無性準此乃知」等と述べ、佛性遍在の理から衆生と諸法との一元論を唱え、無情の有佛性を示唆している。然し、非情有佛性を否定する涅槃經迦葉品に於て、灌頂はなんら言及しないが、次下には恐らく再治者湛然が「私謂言利益者只爲將護未代權機者不宜關於生死涅槃二乘是如來瓦礫是佛性」と明白に述べている。湛然は、灌頂の「情與無情有性無性準此乃知」の意を汲んで、非情佛性説に關する私見を挿入したのであろう。このことは、未だ學者の注意せぬ點である。湛然が、灌頂の意趣を洞察して書き添えたと思われる非情佛性に關する説明は、隨處に見出されるが、ともあれ、金剛鍊論、止觀輔行傳弘決、十不二門等に見える湛然の有名な非情佛性思想の思想的な背景は、もちろん智顛の色香中道説であるが、それをさらに前進させた直接的な背景を求めれば灌頂の涅槃經義疏が指摘されてよいであらう。

以上、章安灌頂にみえる佛性説について、智顛の宗教を繼承する上から、觀心論疏に佛性の天台の意義を見、次に自らの天台佛性觀を涅槃經義疏に窺い、次に諸説批判とこれに對する自説を涅槃經玄義に求め、次に非情佛性説が義疏に斷片的に存することを指摘した。是等は今より概説に過ぎぬが、要するに、灌頂は涅槃經佛性説を天台教學樹立の理論的根據とするに成功したが、智顛の具體的な利那の一念たる佛性のあり方が、灌頂になるとやや理論的客體化的傾向を辿ることとなり、やがて理佛性の徹底的主張たる湛然の非情佛性説をおし進める萌芽となつたと言ふことが許されるであらう。

(略註)